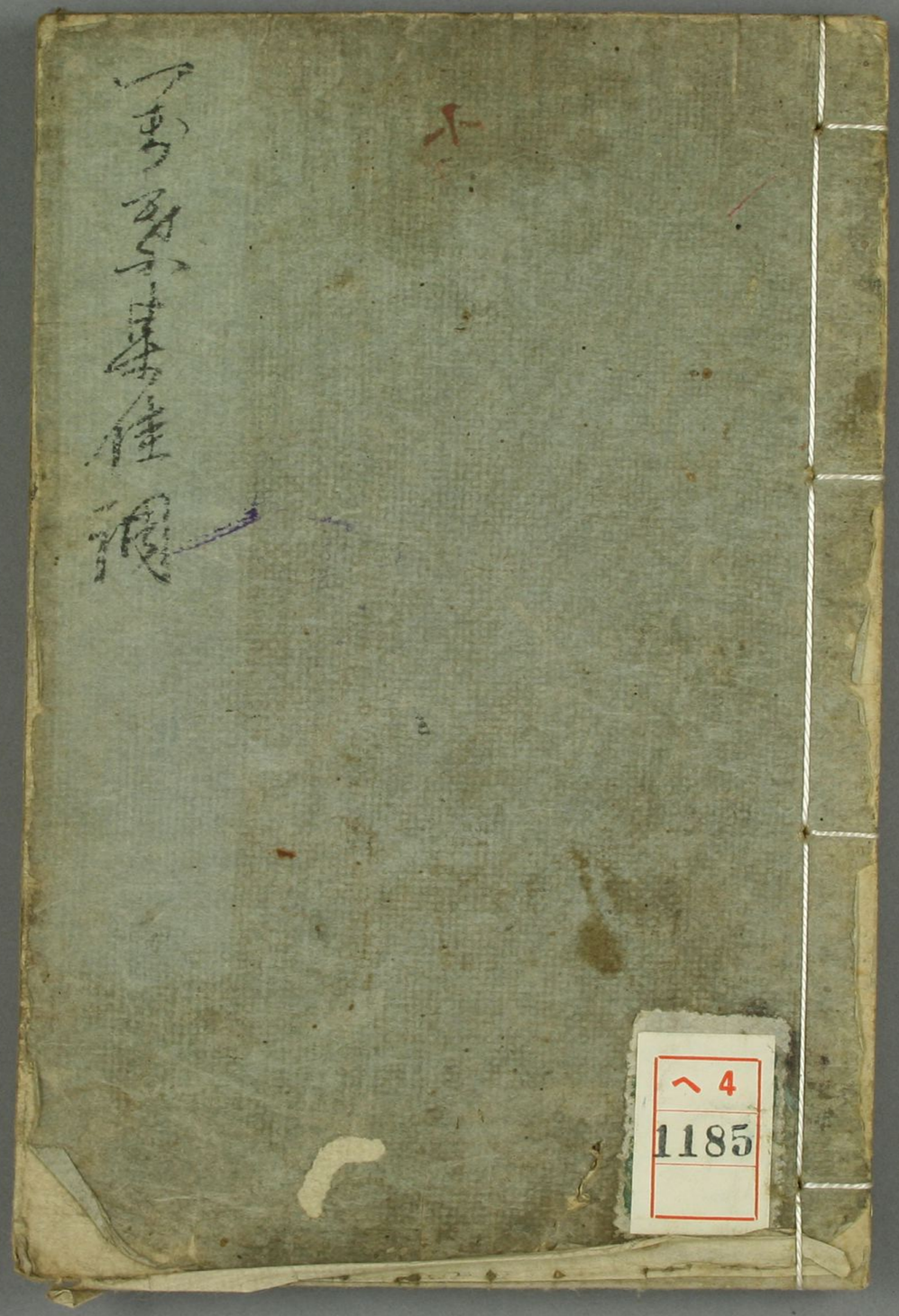
東京書籍組
八
ヘ4
1185

京都帝國大學圖書之印

門 へ 4
號 1.185
卷

第七集住國序

吾山の花ふれてもあやなき事ぬ
こそ書つらねみ秋聖おもきをけ
てもやもの神さつまこそ色をかへ
されば浮世のつゆをかなしみ
志をれたるは代をあしもすも
なのつゆこそあるよりなれ

ちよ長谷氏ぞ
ゆくすえのいはひのみこのかた
ゆくすえねがふよいまかがみ
てゐたものやどのこころばせ
第菜系の中乃ぞ
きもみこのそもえひみてたのき
よいて幼なきこころもちなほ

あもくみや侍ふ
こころ信ふまれ
やどるはのかあ
帰るむ月日
少てとくよみ
かもこみすま
さてのくもゐ

市なるうまれ秋の野山にうつる
ゐもまつ生ゐたるもみける
うれそのもとにうるこの実ひろ人

橘ゐ雅

右物ゐ拾うゐ人をむ世ゐ八
いゐ百丈野を白ゐ足てゐ近
らしてゐゐゐもよゐ野ゐふ信き
ゐのを右ゐ城ゐ足丈ゐえ
ゐい足ゐゐゐ世ゐ野ゐ足て

以前家物がたり文句をみな保元かもよ
くしら辺て年代記の書ハ紀乃
国人書ハ書幸うそもよく見てよ
しをえらひてうつしまれる
これのうつしまれ安よくこんなる物ハ
序三

く辺てうつしてもよくなるべくを
古まがり方をよくみをよく忘えてむ
うと古物がり乃ようそよみせむを次
るやうのわらハ書を世の書ハしよく
えうる物ハよくうつしてよくよる

なくなりぬ侍るなれば
ものよみをむ
本居宣長

万葉集ハいとも古き歌ども
なれ侍ることなれ
ども
おのゝ
おのゝ
ことの
ハいたくあらさりけ
ものいとなくしく
ものをおもふ
ことをハ
ものよきひとくひろく
ものを

えらべる集なれどいにしへをなのうたをひの
うひまなびのよるいもとせまいりてふりぬる
年つもりふるきあまもちかきもとい
たづねすてこうにいまへりをなりふう
よき歌いてこすてかるうくはるきえへ
のこよりをゆきてみやひるいよみ出り
年つもあいこうう真幸ばりへらく此集乃

中なるすきもちくへをうくくのひるおのい
もくへとよりうくへむかうぬえうう
してうひまなびのはうれたるおうもとをち
ちきんうよびたるうんはるうゆきうふ橋
千歳ぬうはううまををいうをうをうむ
きこめてよとすえんまうらいやてまかうて
一の巻ようはめて巻きいうき紐をう

かきをくこゝろはせをくこゝろとなりひをこうちそう
中ま四のみのあるをくれたこゝろひわうまいも
ひゝろこのあとたくゝぬきいてゝゝいを
たいやすくゝゝゝゝもあるへゝの俗をりてゝきぬ
きゝゝゝゝいさゝゝゝるそいけ条乃うきゝ
まゝゝりゝましてゝゝこの言をゝゝもむゝゝん
なるよくゝこを住個ゝゝ名つけつゝいゝ家の

々乃萬望住個望なりゝへるやゝれとゝゝに
えゝゝるはゝゝゝくなを寛政五年
八月大江川のたひのやゝゝまりて紀を乃
しゝゝの国人 中風真幸志ゝ男

萬葉集佳調上巻

雜歌部

春歌

巻三 正月三日内裏の宴の王卿たちをめしてゝ玉箒をとらせ給ひ
賜ふ時の御歌 右弾大体宿禰家持

たまはるのたつねのゝ子はたまぼきてあそぶ日のたに

おなじく七日宴の時の御歌

うぐひすのかたへのいろ乃わかなとりてはやしなふ人の子

巻五 梅花をよめる

たるさしバ月つきくやどのうめ花ゆ

筑前守山上臣憶良

ゆ今史田氏肥人

[illegible]

小野氏淡理

[illegible]

山部赤人

[illegible]

厚見王

[illegible]

丹比真人乙麿

[illegible]

家持

[illegible]

大伴坂上郎女

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

たるまもぐてなんそたたうしもんのうりかけたうわあがぎさ

巻八 志貴皇子

かさまひのいてせのもれほくぶひなるしめとるよいつきちうむ

紀しらし

月理宣令

めくうれいてせのかわのかくきひいてるもるねうやるのくびよ

石上堅魚名

つる歌 大伴坂人

たちたれのそれかるさくのかくぶひかくこいーつちうくひーでなかき

巻十七 正税のうるさふ屋くある 高持

あをあをーたくうのくやこハあわれがうくぎひうるのでわちくる

かくれくこあるもちつくるもくしのきこいがあるもくさきふくう

秋歌

巻八 鶴鳴

ゆふされば佐保の河原の水かさまさる

大津皇子

たちしなくめさまさぶめびをもめふれるもみぢはもれるかね

七夕 柿本

巻十 ひさかたの天の川原に出でたちて

拾遺

ふきかぜのこきまぜひたちつくるきこそきかぜる

巻十 むさかくのあてんちとうあのーでは

ゆふつくしからくまあるもせいつまでくたのくみぢてきくむつくるひとと

たちのぞくるのひかくるくそくあるめのあきさわぞくれたかんう

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

かきごのよもぎれふるこゆあひまもやもみぢがさむたのてるものやうに

藤原為氏八康

乗田の庵をとるある

大伴坂上郎女

こもりくのたつせのやまいろつきぬもぢれのあめふるのみぞしし

[illegible]

家持

さもをしのはぎはぎよりてるもとるもとでもかるるもつる

巻九 弓削皇子

さらしぬ

さられうのとよはもあめしかつのねのきこゆるそこよつきてるる

巻十 柿本人麻呂歌集の中よりいつ

以弱ハ人麻呂歌集の中よりいつ

巻十 花をよめる

[illegible]

[illegible]

[illegible]

いとがうでるもくやるのあさつゆよりもまみどのちるもとし
あるかぜのゆるるをりまけだうぐるれちこのたいろつるまう
いとがわとうるるくくおるくいこるやよくちこえくれがわるぎちちつて
わもつがはもみどだるるおづるきみやるのこあたいもちるかも
ふるきとのたれもみどだるたるもわもてたるぐわぐるうねもものか

此八そ人麿そ歌集乃中ふいい

四ときるある

さをしのよつるるぐやるのをこうぐるわきだかるとをいふるとも

八月をるめる

このうるハさるたぬるしかうのねのきこゆるるるゆつきたるる
ゆるせこがぐしのけぐるおくつゆるとるやうるるるるつきこてるる

おくつゆるとるるふたのしたるるるぐつきのわるをはのるのつきるうれはあるる

雲あるとるあれ

あるるるぐやかるのつぐるるのおかひたるのいづくやるてるるあのあるん

家持

巻七 かるる あるるるる

久〻歌

舎人娘子

巻八 雪をよめる

おほくらのうかべるゆきにうつるまをうたがはかもあるに

元正天皇御製

たまぼこのみちをたづねてこしかどもいまだしらぬかのをとめかも

巻十 よみ人しらず

やたのゝにあさぎりたちてうづまきのうらやるこゑのあはれなるかな

題しらず

ちはやぶるかみのいがきもこしがたしいまはこゝろのかよはねばこそ

あしがきのえだもとをゝにはなさかばこゝろのうちのあきをしらまし

此二首八人麿歌集の中ふたつ

相聞

巻二 石川郎女より大伴宿禰を思ひてよめる歌 大伴宿禰

あづさゆみ引のをのやまのこのしたのかくれてゆくつきをしまつと

大津皇子の石川郎女に贈り給ふ歌

あしひきの山のしたゆくみづのなをしたにながらへこのごろをこそ

石川郎女の答へまうる

あしひきの山のしたゆくみづのなをたにながらへこのごろをこそ

か〻

[illegible]

[illegible]

[illegible]

園に生ひの如くあひていくそくし（まして病る所る時

[illegible]

三方沙弥

巻三　大伴宿禰家持の[illegible]る歌　笠女郎

[illegible]

巻四　[illegible]

やほのゆくさるのおさこもわがこひてあるまきしおきつ[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

おほんとしひてしものとたねどいろのうつろひやもきわざうるかも

市原王

なごのやうにやへのくせるまでのはきさくさくこがめもえゆる

大伴宿禰像見

いたのうちうるはめるさいうめやはるわちんとらひてかめと

大伴宿禰家持

かたぐのやうあきみるくりのおかりしくたつねひろまうるけのかも

廣河の女王

ゑ―――す

ふひぐさやちうぐうぐうるふたりてうまつてふくわごうう

伊良

ゑるせみはもうぐひさりうひゆくうづのみちもわひるむいはもうる

ゆやこいみやちたづくしつきまもてゆうせわがせこそのやうもこうん

ゆれてるうしおうるうるうるうるうるのうのはるのうきせうるうるうるうるうる

巻八 妹坂と大蟻 大伴田村郎女大蟻

つぎしぬくあさぢがはらのつぎてとしれいはきこのわるとわがこうつくし
うるさとのたうしめたをとのかくぎしとつぐやとしいのるつげさや

巻九 笠縫島の図 大伴坂上郎女

たまつのの乃とぢうらさけるふじめゆゆのちくしぬねらしいくるあきと

小治田朝臣廣耳

ほるくぎしちくたのうへの乃うめしのうきこもあれやきこがきぬ

坂と大蟻 家持

たうるのうぐのかほぐれおかがるえつはわるれかねつも

久邇の京 大伴坂上大蟻

久邇の京よりわたるのひとるまるる坂と大蟻よおく

ふるさと

巻七 わしびきのやとべいをうてあきかぜのもるくふふけばかをとーて

巻九 笠縫島の図 ふるの図のはるはるひてかるる

いそのかうふるのわるぐのやはいでびこうろのくもちよこうるまのごろ

巻七 にのみよし

らこ人もこし

ふいろせぐはすてつくばのわきこらやこうるまるてたがるまてこむ

そまうらし

つきこうきこにこうるとけるぐーうたくめぐこうつろふいろとけぐこうさ

つきこうはーよいるもいもこくむあきつのもちよいうろしぬこし

巻十 ぞよよよせておかひをこくふ

こーうもけいはぐたこうきこうきこくびやこるわかこんこーてまたこう

かさく

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

たちくぜのきくまがはつゆをてにそめいのちしらなぎのあさぢ
さかりのくまのうらなみ

はるのくれ　人麿の歌集の中よりつ

ぬばたまのいわがくるかさくらばなびきてぬるん
わさねぐさ　これはんぐ　ごうつくきみがこてまくられてあを
いわがうでまくり　えりもまろうこのこんかくーきたひつぐめる
ちきたこのまくらをまきてはをわれぬるよはもくてとーぐへよける
あーしきのやまきくくとわをたてつきをたれもとじむる
ちりくくこのさーしのちきのくいつまでうつぐこしとーむいのちまるきて
　　ぬばたまのせくはちひをのよ
いをねもやかさるやまはあくねぐるたらぬひを孤こひわるかも
ちちやびとこちのわくまろたやきせるあいびのをのちらばつ方

かしぐはのろちせもつなをのちもわうしいはふはつれはいはるそくしびとも
わくちねのはのかをこのてはごもはるをるいかがも

　　はるをくる人麿の歌集の中よりつ

れたるねのやーかのこうもわきれさるたれはもれらいやめづーも
こうやぐるくいづみのうてふたつこのやしをそをもこうひるる
かふのくにはのいたをとびくぐびのくいまてこなをのでひをちふ
れるるねのもをてくくみちをかをこうをおきてけれやのるひきこやをちん
ひのをぐるのやぐるかくかたうるのみふおるのをやるをてけるもふ
ちをちやぶるかこのいのをちをいえぬべーいをちをけぐのをーををも
うーかくにはのいたをはぐをわをつはのけぐをれをいーいきこぐるにく
わぐをやこうをわーをーをとちくをちるぐかるるすーのたうねのやえーこのわくん

たつせがはもくやこはやせをもむもびちぞてはのびやいかどひきこハも
あをやぎのはがきぬるのみごもりこひやすらむあすをまち
うさぎおるおきもはあをこうるたまのゆくすゑをつぶかうこうくハ
なをてをわるゆるこゝろのはまびさきえをもちぬきこまあいて
あしひきのやまどりのたをれをぐふをのあをぐくうをえをかるねむ
やまーろのはくろかもうるおをくたむやーふれバはやまあひのえき
くれるるのあくろうめこえんあをくろのびあひくーえをふこうるこうろ
あくろめれはのきくろうるあさはのうなひてはるあうんりのから
はのづさゆみむをてゆくぬるとくちるやこひとみものをまのいのねえん
くくちぬのをくーごうのをこのをひごるをていぜくあるくるをはのひて
いをのかくるるのたらはしくうくこよハをうをくしくうをこをはら

はのしびきのやをはいづるつをまのとひをくハひくはをかれを
ものぐををわめるかはのさぶれたをみをちをくをきくハはをかはから
くわやをれやをくしくををくゆくみげのくをしーはををばのををはつよ
みのはをるかをばのををのをたをくしーだのをれハをくををひくをを花
ををつひをのををのいをくををくむををのはをくををねをくをををををを
わくーゆくかをのをれをくのをたをくをのをきくつをれをくをくをかを
をくひのくをくをのをるがはををいををあをくををふをくーくをれをくをえん
おをはめをくはをををいをくーををくをくをくををくををのをのかをををえん

もくしくく

ををくをくひくのわをくのやををくをくをねをつあはくをれをつをくーを

はををを人のくくをくをくを

巻十六 かげよえのうちのもくしかりしちぢのもちぢかくれぬきこぞそこまめ

雜歌

巻一 十市皇女伊勢大神宮ニ参ル時ノ作歌

吹芝刀自

羇をとゝてらめる

河上

かはのへ乃ゆづいさゝもとゝよくるもしびつれ可ものもしらこゝろをもあて

庵陵王を伊勢に遣る時の人麻呂の歌

うちなびくをとこのあがきあはるれやいくごゞとるのたるがあひ

行幸に供奉して作る歌 庵陵王

うつせみのいのちをしけくもしらぬかもしぬちのごのてるとるかもと

明日香の宮より藤原の宮に遷る乃ち

志貴皇子のこゝろ

たゝなめのうでこそかはせやこゝとゝらこゝでふれて

巻三 大納言人主卿の歌

ものもあれたゝやすきぬのふぢごろもたゞこゝにあれば

乙女雪を惜しむ歌 人麻呂

おもかきこゝはかもすもるせばわるぐものいのづるのこゝよいかでせびかも

沼を過ぐる歌 長忌寸意吉麻呂

おかこゝのうちもとでこゝのわびこゝとゝのこゝのうちのらびこゝ

出雲守の獵路池を遊ぶ時の人麻呂

おかきこゝはかもすもるせばるこゝのこゝわるこゝやるたるこゝとゝるこゝ

彩しこゝ

あつみのこゆるみちぶしなるけぶりかな

大宰帥貳小野光孝朝臣

いなぶねのたゝくなみのあとのごとくいたきかつちる

沙弥満誓

らのたゝのたゝみたゝくしわきびくこゝろぶかくふるのあとるごと

菅原道真朝臣

きりのたゝるたゝみのかはのうくるごとかゞなくなるやうかぎみて

故大政大臣の墓原乃ぬれ山沈をとらめる

赤人

いなしのゝのゝきつゝこハとしあつこのこゝいたのたゞさにこたゝひるなり

巻五 松浦にのよ船をしまの行幸の歌

たゝしまのこのかはのゝにいこゝいあれどきこゝやこゝにはつゝはびわ

此歌を昭和の萬葉客等の歌とこゝろみる歌

遊客等の行る歌

ふつゝのはかなめせゝのあゆつるゝたゝせるゝ中が身のもてわれぬ

まつゝまるたゝしてがはゝしのゆつるゝしくまるこゝろぶ〳〵ぢたゝ

ゝかつゝのかはゝしのゆつるゝ中がたゝをとゝれゝたかめ

昭和の遊客等の歌

ゝのゆつるまつゝのかはゝのゝるゝ

たゝるゝれバつぶ〳〵のゝのかゝのかゝゝるゝ中がたゝをとゝれゝたかめ

まつゝぶはたゝせのゝるゝ

領巾麾嶽たゝる先人

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

大伴坂上郎女

[illegible]

大伴宿禰家持

[illegible]

[illegible]

久迩の京を思ふる歌

[illegible]

[illegible]

奉和

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

此歌ハ人麿歌集の中ニ入

いなゝ〳〵のこゝにたちぬをわせこそ
めさるおかぐやさ
いのとらある

おやたちのみをのやるしはじめたふ
みなのれのさやさや
ものせばはなぐるこゝろをのせこそ
くやこゝろぐしひさるみはをのさやさ

葉とよもれ

いなゝ〳〵よあをこゝんれもわのごろこゝわのひごろよかぐーとうこん
ゆくかはのをぶしれのこゝわぐこゝぶれてこゝのひごろ

此二首人麿歌集の中よりつ

けとらえる

こゝしのあをねぐこゝのこゝしーこゝれなうこゝむたてめこゝよ

葉をとらある

いはがねとわのかをひぢのたのもこゝ
ある　こゝとれしてとらある

こゝきせよちぐちつこゝらびやるのなかんからしびめこゝ
をこゝとらある

こゝかげこゝのもくるるちぐちたこゝ

此二首同巻の中ニ

ちぐしみ〳〵つこゝしこゝ

巻十九

巻九ニ出る

こゝぐこゝのこゝ〳〵ぶこゝこゝねのやこゝ
おこゝこゝぐこゝたなぐこゝこゝぐの

[illegible]

[illegible]

巻十五 [illegible]

[illegible]

巻十六 為[illegible]

[illegible]

小[illegible]

[illegible]

侍人を[illegible]

[illegible]

[illegible]

新中國撰入集作者 庚縄朝集使より所々京に入る程
より還る時なり
こぞのあきのあひだ　まつのこゑ　それがなかめづらしきやどのうめ
巻十九　遠江にて　なにとなく　船人のこゑ　きくたびに
ものさびしさに　きみがはるかに　こぎはてぬ
勇士の名を　振るうと　義よ　弘　性元
ますらをは　たちまちに　たつべしの　ちはやぶる　かみのつぐひか　ふつぬ
神勢の海より　遊ぶ　対馬の海より　舟出で　義元
なる
たごのうらの　うつせ　人もなし　内義忠　清原
壬申の年乱　乱　弘

なかきみ　ハかぐ　ふりてせば　あふぎ　ぬぐ　ぬぎ　ぬぎ　ぬぎ
大将軍　諸国大使　大体は
おかきこ　いかに　ふりませば　ぐ　ぬぎ　ぬぎ　ぬぎ　ぬぎ
ら　美人　ちらし
新嘗會の　ちれわ　ある　話　ちらし　ある
大和國守　藤原　永平　新
てぐ　れて　ぶつ　ものの　ぐ　いも　ぐ　ぬぎ　ぬぎ　ぬぎ　ぬぎ
巻十　言國　ぬぎ　ぬぎ　ぬぎ　ぬぎ　ぬぎ　ぬぎ　ぬぎ　ぬぎ
家持
ぬぎ　ぬぎ　ぬぎ　ぬぎ　ぬぎ　ぬぎ　ぬぎ　ぬぎ　ぬぎ　ぬぎ
ぬぎ　ぬぎ　ぬぎ　ぬぎ　ぬぎ　ぬぎ　ぬぎ　ぬぎ　ぬぎ　ぬぎ
散位馬史國人

[illegible]

題しらず

家持

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

文武を[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

人麿

[illegible]

近江國[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

夫恵人の歌ことゝるうゝ　恵人手書

たゝもぐのてゝまたゝりゆくさくらかさくらめたゝり

恵人

題しらず

さくらのえろかるよりはたらてうわてせむこのたゝもぬいてゝれびと

徳積新民元

志賀よ舞まする時らある

まつがいのたゝしまたゝくわゝぎたゝうんたゝのはかつゝらひたゝもたゝ

角足森名

題しらず

すゝのえはたゝのつゝぐゝたゝかつゝえみひがはかきゝのいでゝゝしゝたゝろ

上野の國つゝゝ万を所詠の國絳云侍よりゝゝらある

田口益人大夫

ゝるゝれどあうぬたゝのゝゝはゝかきゝのみたゝかゝこゝたゝゝゝゝかも

題しらず

たつたやまゝゆつこえゆたゝてゝいかざきのたゝぬゝゝがゝゝよひあうねむ

つゝゝ一下る時海路ゆたゝらある　人麻呂

おなぐゝゝゝたゝみのゝゝゝ乃おたゝたなゝゝゝよかゝゝぬやまゝぐゝるねハ

巻　夫のいせの國よ行ゝ時らある　墓標載の歌

かむゝぞのいせのたゝたゝゝゝゝ

[illegible]

幸若をとこ[illegible]

[illegible]

多摩浦をそこらめぐる　大宰帥大伴旅人

いぶきこがしひのかくるまきのうらとてきめれもあきれつゝん

難波なる安倍の時の歌　船王

[illegible]

聖武天皇のおかみうた

いかふかうしあごれてうぐいすせげきやひめうまたつるこゑ

巻七　柿本人麿

[illegible]

[illegible]

おかものみこたちをゝびよりもてこゝかてせばおもうのうたうるる

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

きみまくばかたそこよりそもむくてげのそくしもとんとも
遣唐使のふね難波より出船する時の歌
たびらのやどりせむのもとかはかぎりなきかなる
巻十二 題しらず
ほくしぐひとそこのくにもとそるふねとうんしかも
くきうげのあくるのきれかしつてかきそかやるそらゆしも
もこのえのきしもむのくるわいそにいれときそとくぬひなす
巻十三 あまをとこともいでこれはあまをとこらゆしなくるる
巻十四 陸奥人の歌
いのはゆもぐもあそてかもぬのもしるゆしかくばをぬん
巻十五 新羅に遣はる使人等の歌 并に海路の吉凶

うるはしくよくうれはしむらふふそひかぜりくるまそいかあるよ
船はそめて海に入る時の歌
ねはこそのよいあるあくしたのうにあるるもたるる
もれはくるもたそもりのそくるがうれはきそとそもそふる
わくつくのくくるいでるもそるがはたえんひはこそわがこひやまも
妻戀の圖 もつ高に船をつる歌を送りてよめる歌
大石蓑麻呂
いそでしるたぐもくろたくせそのうをとまけばくやうはまる
巻十六 題しらず
やるふはのきそくるかいせるあるくるのやこいわとれのねつ
わがいのもくとそるるのしそるふこそくくるかしまびまる

出門浦より船出する夜月をながめてよめる歌

やまのはにつきかたぶけばはるかなるあまのかるもの[illegible]

われのみやなにはのあしのくれぬらん

周防国玖珠郡森里布の浦をゆくときよめる

いへびとはかつがるやといたしひしたびびゆくれと

大島の浦門をこぎゆくとき

[illegible]

国名 秋庭

海をこぎ一夕をとんてらある　土師稲足

かしまぶるなかつかぜにはやはらひわたる

[illegible]

ゆきてはいかるかせをしーつぶとこがたこぎてはひこぎてはやまし

引津のくるやに船をとるときよめる歌

あをやぎやかをつるひとえてしがたなるのうちやこうつぶたん

肥前国松浦郡狗島のうちやこ船泊る夜よめる歌

たくしーびからつねをしたくしむまつのうちいもぎつきはまつて

巻七 大宰帥大伴卿大納言に任られて京上する時作る歌

海路をくらるをくる

いのちつのくまぶしーかをちくあがこつれのをかわがらひざらむ

那野の船泊をくるくらある　家持

ふるのうみにかをかをつるいやとーのはのまつて志のたん

巻十九 入唐大使藤原朝臣清河の

藤原朝臣清河

かまくらのかハつくりもりつのうめのそれさきまてわすれまてかつサくらのよそ
ほ中ちるよりおの頃をこようつれ一時おのとせいて名家使
撮久米度縄ゝおそる歌　家持
いもせのかわさくらぎまつのぞくらてもんらかりぞよせもやのさん
歩つ繪大伴古慈悲宿禰家ゝ入唐副使胡麻呂宿禰祢家ゝ
餞せる時ゝ
多治比真人廣主
かくそくゆきたるもしてかつくしまもくらくそくうたて
梁田新郡上丁大田新二成
巻三十終
なのはとそこぶてこれべかまづるにこるだのねのくしでしれひく
伊豆の石丈陸國の防人新領使大目息長真人國島ら
進せる歌の中ゝいつ

防人ゝ名ゝ有るゝ歌ひとの人ゝ名ゝ有るゝ之の
家持
ちはやぶるかみのいかきをこえわたるびとそこゝろをつくしたりける
隈坂の安宿禰奈麻呂撮安宿禰奈麻呂のためゝ作る
うた
安宿禰奈麻呂
おほきみのしこのみたてとまもるとそのひようつみやこのかる
大原今城真人宅ゝ因幡ゝ大伴宿禰家持と餞せる時
乃歌
家持
あをかせのさとふきこしてはぐくもるかぐそびこうひわつ
賀

巻八　志賀皇子の御こひの御歌

いはばしるたるみの上のさわらびの萌え出る春になりにけるかも

巻六　元正天皇九大夫橘諸の宅に幸せる時の歌

しかすがの野のうへのうはぎ摘みてけるしるしもなしや恋の慰に

巻十　作者未詳

春霞たなびくかぎりうぐひすの鳴くべき月の来にけるかも

巻二　石川夫人

あをによし奈良の大路は行き来れど人目を多み逢はぬ君かも

巻三　大伴坂上郎女

ぬばたまの夜の更けぬれば久方の月の傾くまで恋ひにけるかも

巻七　作者未詳

ぬばたまの黒髪山の山苔の苔のごとこの恋をせむ

巻九　作者未詳

春霞たなびく山の桜花一目だに君と相見てしかも

巻八　志賀皇子の御こひの御歌

いはばしるたるみの上のさわらびの萌え出る春になりにけるかも

巻六　元正天皇九大夫橘諸の宅に幸せる時の歌

しかすがの野のうへのうはぎ摘みてけるしるしもなしや恋の慰に

巻十　作者未詳

春霞たなびくかぎりうぐひすの鳴くべき月の来にけるかも

巻二　石川夫人

あをによし奈良の大路は行き来れど人目を多み逢はぬ君かも

巻三　大伴坂上郎女

ぬばたまの夜の更けぬれば久方の月の傾くまで恋ひにけるかも

巻七　作者未詳

ぬばたまの黒髪山の山苔の苔のごとこの恋をせむ

巻九　作者未詳

春霞たなびく山の桜花一目だに君と相見てしかも

かつしかの里をのぞみしれば[illegible]

此歌は[illegible]歌集の中ふいつ

旋頭歌

巻七 [illegible]

[illegible]人丸

[illegible]

萬葉集佳調下巻

長歌 旋

相聞

巻二 石見のくにより妻をわかれて上る時よめる歌

人麻呂

[illegible]

かつらこもれどいやとをこさかつぬいやたうふやうこえきぬ。故
たかくさのおもしろをてちぬぎんどやがどうんたのびけ
さのやな。

反歌

いんさこのやたつよやうのさのうちやがうでとらうむう
つぬさうみだうみのうみのおとうとうぐうのきうるいくうかうぐ海石
うるはうるおうるそうるはうるひたうびきね
しうとぶうるのふのあてくもどやぬるいくうらたけうぐたうつ
たのけうれうるぐうるもむうぐうろとうてみはもひつが(ぎう
きれどおかうどねのけううのやうるうかみぐだのううるもやもがひ。

いやかうでさやもうこうびつるごるやぐうもやうのうとうるむ
けうううふつうさのをしうぐうぶかくうろひくれびあうつうみけうひさ
しぬれおもううとうおうるうれいもうさたくのおうろあのうでいと隠
けううそぬれぬ。

巻四 筑紫の國より時よりて

丹生王人笠麻呂

巨女のうしぐうるのうるかぐうるひみつのううるでうきふぐううふ
もうううさうぐうけぐやうこうおうひつうとれびおうくれのあうさぐけうご
けうるおうくうたべのねのうしけうるけうのうのうのうのうすぐ
さけうるうううけうあうやうぐいのあううけうぐうううれびあうとやううの。
かぐうううふうううれびううのうううくうがうあうぐうるうれれのく
ふべううじむうのおううぐうとううとうぐひうようつけうさ。遠

我八茂ノ侭カ

たまぐしをかこのえらびゆゝつまぐしふかぐらのそゝつたなみの（上）とゝいゆく
さぐゝみゝたのゐをゝいゆくかゝふ（津方）ゝとびづるうゝゐとゝぐて
とゝもゝどもあたゞゝしゆゝばゝ一のゝふあゝゐのゝゝ（よゝゝふるびき）
ちゝでゝをおひゝるゝをのゝゐゐもゝたゞゝもゝゝふのゝゝゞきゝゝ（茂）
紀伊のくふゝ者ますはゝゝもの人よゝゝゝんゝゝ咲るふ
あゝゝゝゝゝゝくゝゝある

今村

もゝめろぎのゝゝてゝゝゝのゝゝゝゝのゝゝゝゝゝゝ

[illegible]

たづねてしらまほしきあうのうらのなかのしまもりやくしのみ

はるひぐやくるまがしらこころ

天武天皇乃大こうそ

みちのくにがうねこそゆきはふりくれ　まるくぐで

なめはふりくる　てのゆきのとけそめにけり　まるまき

がごとくもしらしどもひつぐてくるこのやてみがらを

をはのあきたるあとをもこそらがれ

人麿

しるだにとこそうねびのやまけがしいしのこゑゆあれ

ましかくのことぐつのよくよわめのしたぶつ

めしいとそこそこうしやそこそおきてあそふよすたすこやる

そこそこえばうきてふおもおもしめせおあそがこうるれしよいあれど

いなでしのあつみのこしのさいなしなれよりつれこやよいのめの

しいふとつろしめりそむとあるぐのからもみこのおかこやい

さいこそきくどもおかいとのいこいこいつどいはるくさしたづく

おひたかのとみこれたるびのそこもあるあしころおかこ

やぐこうろうしばかもしいしこ

反歌

さいなるこの土ぶのかいこさこさいこやびのもあもこ

さいこるみのたいこのおかいつぐぐいこいこいこいこ

[illegible]

やまみづいけのおかきこのくさ　こそしたおめのこそこそしたし
さはふあれぐもやちのみのくさ　ゐるまかるもとこそ　ろもとらの
そにろぐれちちこおそのめのぐ　ぐよこやぐぐ　ぐらぐぐ　くちぜん
りーそよ　おかこやぐいふれなもておさかはわちふれこ
かひゆかはこるかいのこのもろたゆるこもくこのやちろやや
たのらいくぐーるたぐよやこいみせどあるねかし

散

反歌

えれどあるあよーのかはろとこちよのたゆるこもくてるかつしし
やまみづいこぐれかこかうなぐこうさびせとどーろがは
しぐれかちにたのものとこうーまもーてのかーこぐにこ

されバたなるあとがきやちよやちづこのろんるこうとどるべバ
はれかざーもちあさたくかみだかぐやちゆこのはのかもおか
こんこよつこちとかこつぐふうかはとたたおちせこぐそーし
わくーやちこはしらそてつるかこみのこうこも

短歌

やまこーいかのおかきみたのひるえのこぐうしるぐがきび
ぜてとふぐーこうひこやことたおそてかちくのちちせこやちバ
ちこのこのこれあちこやちちとこくぐねのおちとおーるぐこう
ちちのあぐここえてしくかぐろしのゆちちくれこゆこちる
あさのおかろよはちくだくもこのこかーかぐここてかくく
たびやどちせひこ一（ねもと）

新歌

あきのゝやどるたびびとゝもゝしきにあめつちやしら（なまよ）
すゝきかるあしのよはのまぢやうぞみまくさかるゝこそ
をむうのみゝかぐろひのたかへてかゝれどつきかくぞきぬ
ひかりのゝこのみやてのくてゝもあてらかたしゝとゝきむう

菊原の宮よたてる民うらもあるゝ

やもゝしゝわがおかきこたうひかる。えのみこあゝゝこのゝぞうゝが
うゝゝこゝゝてゝにとめゝたまもゝんとゝあゝゝのゝたてゝもゝんとかし
なゝうゝなかゝもゝゝてゝあめつゝもゝゝてあれてゝゝもゝゝゝの。
あゝみのゝゝにろゝこゝろまでのゝたれゝゝゝやゝのゝまゝゝゝくゝゝゝのつゝゝ
でゝとゝあゝゝゝあゝやゝゝゝゝゝがゝゝゝゝゝ

やまハうとものたかうがどゆくまねるふどよりくあるまくたのーうく
あめのくかけたのやるやえのうがで乃ゑびーこそ八ぢくーーやるーーめうあ
乃ゑーーえび。

巻二 武尊ゑ猟場池ゑ遊てひはらあるる

人麿

やまとみーーうどおかきみたこのひうるかがのいのくうれぐすまで。
ミかかたーせるわうごもとがうぢのくとのよまくくくいたくしとろう
めうづーくくくいたくしかくかまーーあいたくしとろのくうづく
ちくひいたくしかくかーーこくとづくうくくくいたくのため
くるごくくくるくかくあーーづくくくれどくるくのいやめーー
くいかのおかきこかく。

反歌

ちめろざハかくふーーてせげはくくくのくくくくやるくくくく

なるらんのかしのくんぐつもちひるまるがのふねこそらぐのくるの
こもるゆいでくるくるふねのくるねあるくるゆいゆくたがかぐ
そもつもとびものぼくぼくかゆくひをゆきかくくるゆくと
えいくくもつびひもえびなづくるまくくおやくくもはん
のみかもせのくこもるづくくあくるふくのやるもつあるくくぐ
ゐくかはくえのわくくもくそのやるのくぐのくぐくぐひの
ものやくものくんのたつのくくるくくもくれ
るやくのもまくるのなくるふねのくるねくれどあくのあねかも

反歌

ふねのねくもおくるゆくふくれづくのくるくあれぐくのくるの
ゐくねのねくたのくかくくみおくるぐゆいゆくくかくくるびく
あくを

仲三年八月廿五日の歌集の中おれ

赤人

神岳は山もとくもあり

こもりくのかくもびやくふびくえさくまでよおひたる。つがのきのいや
つぎくくくたかづくたかゆくまくおくとつもやくくくからくもおく
もくのふくくさくやこハやくくかくふのはくかくくくるびよハ
やくもくかくくくおくのくハかくくくやくくおくぐもくたぐハ
くぐれくくゆくぐくのくかくもぐハくくくくくるぐくふねのくくく
うゆいくくくくはくぐ

反歌

あくくのかくはくのくくまぐくくくくびたつくくのあくひくくぐくくくくひくの
角麻の津ふくくくくく

笠村

さしのぐらみてぬうのくるぶねおかぶねよりとりてぬきおとしてにされ
とりとうとりいでゝあくぎつゝごとゆくばかりとりとりたびみて
ひぐらしにおるとりあをやくくもりてとりたびみて
あれば[illegible]てゝうるもるしなふけつゝこのてよかしうる
うるおとてうがくてもめびつやとしまぬと

巻三 羇旅のつゝく

三みの人きつゝ伝

わくびゝあやしきものゝおくびらしるやうたておきもちう
なみとゝらりめびらしおるもつきおうのゆゆされば
ちびをとうしめあるればもやをとひしむあをきおのやうと
かしこゝおるびらしるゝいそがくもあてゝつかゝのうもあうむと

懐古

かくるくゝあやよかしこゝたくしびめがゝのみてがくゝたと
むくくゝひゝげくゝゝうるとしづめゝるもさいやゝしてばひ
しゝとひゝてびまるひゝのいゝをらのひゝふゝめゝるもひ
くゝろひゝがおゝひつぐゝねをわゝのくゝこゝおるひゝのくゝれゝがゝの
ゝくゝのはくゝてゝゝてづうゝたくゝしゝるひゝてがゝいゝるゝがゝいゝびゝ
いゝゝひゝくゝゝゝるゝゝいゝまゝをゝくゝてゝゝゝゝるゝかゝ

恋ひ

かゝよゝてゝいゝひゝてゝくゝくゝくゝゝゝゝゝやゝるゝのゝくゝゝゝゝがゝのゝくゝ

一きくたにやとゝぎすのさそはるゝはつかりつゝひとつゝ
るのちとせをとゝぐめのそへてこゝろもそへさはよみ
もてはあれどもたのひかるゑものかどふかしもすゝ
おめのしゝをもとひ一たるひとおかゝ
ゝとゝぐゝもとてかりこゝのたゝさうひてつのたゝさ
るかゝはせゝなゝしの一ふみおそにかゝづるゝ
もろくのおかうかみもたゝびさゝとゝわめ
つゝのおかうかみもやゝとゝおかゝゝるゑさかゝの
あるのゝろゝはのまがゝるゝゝたるひとゝとゝてかゝ
ゝゝゝゝゝたかゝみゝたゝゝゝねのゝゝゝて
ゝゝかゝゝたゝゝゝはとゝゝゝゝゝ

阿庭可遠志ちのの

さゝゝゝゝおかゝゝのゝゝゝゝゝ

とりのはふかくもうてゝ　ゆみ
やたのこもちゆつだれよおもたぐ
こゝろのわそのかはろもつ
もりせめのつくるゆつだれこゝろ

紀伊の國よきひはらめる　赤人

やもこゝ　いづこおかきこのゆつ
ろづこゝゆふたそりしるこゝ
なるこゝさるもぐこちひもどたる
ゝこたそびしまやは

反歌

わうのゝこゝにちかこゝれがとるあ

滝無

紀ゝゝ

やもこゝみゝ　いづこおかきこのたりゝゝゝゝのこゝやたもるづく
あゝたがこゝかくるこのきこゝかゝもこゝたがこゝはるこゝ
ア　おこされどゝたもこゝる　このやるれいやまゝくはこのか
ゝのたゆるこゝもゝくゝゝこゝのおゝこゝやじゝづねはこゝむ

反歌

ゝゝこゝのゝれゝゆけゆゝばゝゝきゝゝゝゝ

のしぶのうた

反歌

あしぐるのやとりのあるこかりびとさうやたぐさうけみだれたる

難波の宮ふ年ものあるこ　金村

おしてるおほふはのえだのしぐれの

おもひやうてつれなくおもしたひなぐ

乃うやふてうばしらぶてうしきてどとてどたをどをあた

まへおうれどもあだしのそくうしのふ乃やとものと

ぶりしてこやうらもたびしよはあれど

反歌

ひのるとうあたるうしとぶねこぐでしたびのやどりかぢのおきこ

音

車持朝臣千年

いなみとおもとぶときうとうとうとびきはつるたるもふわきたなぐる

もんなるとうゆうるるぶぶるみるる。一つあるこのいやまてくくう

つるふんるよるうよくるるるいるのこにあるたるめやびきるる

うのいさるめれるきこのうみたるる。

秀 迴

反歌

きくたるうのもくるるるきるるこのえ乃きしのくるるにまひ紅

播磨の國印南野ふ年ものあるる

金村

なるるるるこのうれせんるるるわるるぐるしるるるるるるぐ

るるぐるにたるるしかるるつゆるるぐるにかるるやるるつあるるるるあるる

とゝきけどふゆのゝゝのたのもしかるべきとのゝ
ふたとやめのおもひたるこゝろ
をしたのみ

遠しゝ以

赤人

やまゝしいかゝなるきみがゝたうもとゝるいるもの
おかゝらのはゝふにのゝゝこのゝゝいたびつゝと
あをがねまくまくもとかやくとゝとゝみぐ
もつるゝひげるをゝゝゝゝもやくあるゝのゝ
もつゝきくゝもつゝくる
やまゝしいかがおかきみのゝゝたるゝのゝやたゝ

くもゝたるびくがはゝやゝぜのゝゝ
ゝくゝゝかゝゝれゝゝやゝゝのゝゝのゝ
くのたゝゝのゝゝゝのゝゝゝゝゝ

反歌

かゝゝゝのゝゝゝゝゝたゝゝゝゝゝ

今村

巻八 入唐使よおくる三の

たゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
るのゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
つゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

巻七 三月のつゝみのうちにてみひらやとまりたる歌

院宣和泉式部

やまとうたのこゝろをしるらんとのたまはせしかばたゞちにかきてたてまつりける

さしかへしたゞちにかきてたてまつりける

はるのうちはなにのこゝろをしるらんとのたまはせしかばたゞちにかきてたてまつりける

ちはやぶるかみのよはのかぎりにてはるのうちはなにのこゝろをしるらんとのたまはせしかばたゞちにかきてたてまつりける

反歌

ちはやぶるかみのよはのかぎりにてはるのうちはなにのこゝろをしるらんとのたまはせしかばたゞちにかきてたてまつりける

巻九 入唐使にてまかりわたる歌

ふるさとにやどりをしてはなれぬるかりがねのこゝろをしるらんとのたまはせしかばたゞちにかきてたてまつりける

ふるさとにやどりをしてはなれぬるかりがねのこゝろをしるらんとのたまはせしかばたゞちにかきてたてまつりける

えのわがなかにかくるゝものをしるらんとのたまはせしかばたゞちにかきてたてまつりける

しるらんとのたまはせしかばたゞちにかきてたてまつりける

わがこゝろをしるらんとのたまはせしかばたゞちにかきてたてまつりける

のこゝろをしるらんとのたまはせしかばたゞちにかきてたてまつりける

巻十 やまのこゝろをしるらんとのたまはせしかばたゞちにかきてたてまつりける

ふるさとのやまのこゝろをしるらんとのたまはせしかばたゞちにかきてたてまつりける

もゝあらぬかぎりのやまのこゝろをしるらんとのたまはせしかばたゞちにかきてたてまつりける

こゝろをしるらんとのたまはせしかばたゞちにかきてたてまつりける

てゆくこゝろをしるらんとのたまはせしかばたゞちにかきてたてまつりける

ちはやぶるかみのよはのかぎりにてはるのうちはなにのこゝろをしるらんとのたまはせしかばたゞちにかきてたてまつりける

ちはやぶるかみのよはのかぎりにてはるのうちはなにのこゝろをしるらんとのたまはせしかばたゞちにかきてたてまつりける

はさまるもつくるとてあるとんでもやまのくんだがいろ
のうねびのゝやふみやぐゝまでゝてゝたのめのゝた
ちゝゝしめんるもめろぐみあめのゝつぐとつぐてくるきゝ
のみらくゝかくさもぬあのゝさゝろともめゝぐゝきいめつくて
つゝくるおやのつのゝもちゝゝてゝぐゝたゝゝくるゝゝのこ
ろゝいやつぐゝくゝゝゝるひとのかゝちつぐでゝきくゝひのがゝに
せゝじゝもゝあゝゝゝゝゝゝゝきゝたうのかゝぐゝおゝからろうゝゝろ
おもひゝゝむゝるゝぐゝのゝおやのゝるゝれおゝゝものゝゝもゝゝふ
わくゝゝゝゝゝゝゝのゝゝ
ちゝゝゝゝのやゝゝのゝたゝわゝゝゝゝたゝゝのゝゝろゝつゝめ
るゝぐゝだゝゝゝゝゝゝゝ

[illegible]ぬぎかけ[illegible]きみこのみこと乃おもの[illegible]
せばぱ[illegible]れの[illegible]
めの[illegible]ものえものおもかげ[illegible]
わ[illegible]てん[illegible]
のと[illegible]
て[illegible]
そこゆ[illegible]このみやびとゆく[illegible]

反歌

えさ[illegible]の[illegible]
おのねさひひ[illegible]せれ[illegible]

沼歌 [illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

みこのわがのおかをみのたまもれば
ふるくまびのひとりとなきみ　あさこやとわをれたまふの
みこやとそうしきこそふつうつそと　ぬしひとそにばるべば
をれをもをかがし　いのをたそばかみどばかがし　ちをきこえのうでこ
でをこかがこるひえれどもあのびかをづをのいやめづらしたまか
しきこをおのくいでやーてあをそびしもしをくしりまき
のびのくやをとをこみやをきふめたまひてあがきをもふめこをし
たをえぬをこのれかもあやふかをすぬえをのかこをひづをあを
をちのがらをひをきこをぶかをつをのあをしをえてゆをづのかゆを
のくゆをぬかをどねのたゆをふをればおをひやるかをうをもをのくび
をこゆをえてーせんをもびゆをもをいをなのをもをたをえびおめつをの

いやををかなのくをぬびゆをむをれをかをせるあををのがはをうをづる
をでてーをーをくやーわのがおかをををのかをこるをこをと
あをものがはをのくををわをーせをををばをなのをををこをづをのをるをあをし
はのをものがはあをのをふをんをもはををやをもわのがおかをををのみをるををれをぬ

市をを尊の城との殯宮の時らある

かをををくをしゆーををかをしをををくをあやふかをーををさあをををのをのをるをのをのをくを
ををえををうををををのをををを

やうるゑにくとやはせとをつるくめくあくもちくるめくこくこたのくこくたた
しくたくれればおりくうくて大御身たちくとつおどくて大御手よゆくくちかく
しいくいくるくくあくきくしくくくしひくくくのくるくつくくこのおくくいくのくちち
のくくくくきくくくくくでふくくたくくるくるくくくくく

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

徐庶の去同乃姫を墓をとる時よりあるる

赤人

いかにしてあるらんひのたづくるのおびとるかしらゆびそ
つるぶしくんかつしのの[illegible]のてごれがおくつるとこしきに
たづたるのそやたづくあるくんでかねのやかしくいきと
のうもかよのみもこれいかとくるくて

反歌

かつしのの[illegible]のいかるようたちやもびくたるもかなうんてごるすたるは
安積のやようせ[illegible]けるらんる

大伴持

かくるるたのやようのうしわのおやきみとこのみるとものあ
やそものとかつてのくんびやもひたるひあさがるようまつふお
さいしゆよのようとあたいおたるのくちおしとるめこて
ろとうしたるくるかいくだちやるこぶちのたづてさくるれ
うつろいみそらのちがくのこたるうしてるるものこころよ
まおるうしつるぎたるちさいしよるくはるあびさゆしゆぎもう
おしてこのめつちといやるかなのぶちろびようがくもがもたた

めめ[illegible]みこのうがごのさぎくかなひさわぐらねそ注ろくよころも
とものそそづねそもすーきそしーるまし、やひろよがそーふれぞ。
の形しきろかも。

巻三 [illegible]

かくそりくしもあやよかしそーふぐらくのうやこまらてよひてハーも。
うもてあれぐしもきみハーしもおかまーてせぐゆそむうひぐーの
となぐくつのこうきうがみのぐそあわみぐそあすぐてうつく
かーこうぐ。ちしーこのーていつーかも。えむたくーてるーてかそう
づきのたもーそむとわぐしーこのみこそハぐるされハぐくを
つそがへのぐふつひとまのーたぢゆのぐーくんこあてだし。
なぐづそのーぐれのあそハおかとのくこぐうまそくーつあひ。

そびくるはふくとたまぐまてそうがくたのぐーこゆそうるふゆの
あーたハさーやまぐ、ねくそーたつきとおかうそうとくーまま
ひくあそハーわがあかそみとがひくそうとくーしるの
そかぐこみねぐあうねぐくうぐよるがくーもがくーおかぐねのたのるる
とくそにおくぐれうめかもてくるおかーあをるるくれハさろくよ。
かぐーつてくくうくちひさひみやのやねとハくよのかろあくきぬ
きくるハいめかくうつくこのもとくくもるのてくるくそよのくだし。
そこのべろくうくちゆつあくはーふハくれくそうつかしくそうつはば
ふうまくつれハゆくくうくちのたづくくをくくよおもぐもくる
しくとくみたくぐくしおくくのくをかくいなぐうくでゆくくよ
さくーてんくどくてくくくぬくくるハたのぐ。あくたくるのこんつく

ごとにおのをのをのをのをのをけさつゆたまぶきかくてなりぬれ。
かしこまれども。

巻第五寺参りしてかへるをいとむ歌　丹比大夫

ゆきさるべきあしでまゐりぐさあをくれがたのやまとがはとり
ものうらうらにてこのをとりはいたもれみわとまろうとのおね
さうこうこうこうこうこうひさぬまとゆくらびのかてぬぎ
くくくくかぜのみえぬごとくあらのひふかして。
わかれてはいなびきせてもれぐろぶでかくしそ
ちるもあむ。

歌よいまへのまつりあいものてふ
ほかりそのいまへはもとういまこすえ
なのあるよくこのをとをもひあきらめ
てもとれうつろひうさまをもも
ふきあるさんあるかれいまの
へいまへとこいまなりとてふるものく
なつてをおもいまるそまへるなう
ふをさそれいも学のあるこのよ

こゝろあらてまんこゝろのゆきゝのうち
なるんみやひとうきそうこうよ
をゝゝいてゝかのいとゝあかきは
まのようこかるをもやそのこん
なようゝなてゝのうこんれめ
ゝ形をいてやいとへこのゆをを
いけるもいゝとのまうまなら
ゆゝもこゝゝくいうゝへをうか

へなゝくいものうゝひまけち
めをもゝひめゝあゝめやゝゝみの
めゝよまゝるいさをゝゝかはめて
よゝゝゝすもあゝむ

平春海

此まきものの見きはなこゝろに入ひゝくを
すゝめおきゝるをたゞ人こゝろへふりて
板み書こゝしつなれとれしむい法きゝる
ゝゝゝ如くまき一きとすへし

寛政の六とせ弥生の廿日

長瀬真幸記す

寛政六年四月朔日

京都　三條通升屋町　出雲寺文次郎

東都　本石町四町目　堀野屋仁兵衛

山下御門前山下町　萬屋太次右衛門

蘭香堂藏版目録

江戸芝神明前山下門前　萬屋太治右衛門

清　顧世澄先生著　全六十四冊
瘍醫大全　黒樹庵先生点
楊梅結毒之部出来

傷寒論選註　津田道齋著　全二冊
傷寒津氏微　全二冊

經絡發明　菊地玄臧著　全一冊

讀書會意　太室先生著　全三冊

平安海大人著
拔沖法四冨士百首　全一冊

訓點千字文　蒹山先生点　全一冊

日光山道中記　全一枚

東江先生墨帖類

楷書千字文　全二冊
行書千字文　同
草書千字文　同

書話　全三冊
書法圖　全一冊
篆説　同
隸説　同

古今和歌集序　同

寛永法皇御撰
集外三十六歌仙　肖像さしき　全一冊

5 年 3 月

長雄古今和歌集序　百頼先生

将棋袖珍手段　さしうさ

杉花軍之　芳野之記　橘千蔭大人臨摸

小野道風書秋萩帖　文嶺先生譯文

掌中書籍目録　折本　一冊

平春海大人著　二十一代集英三千六人名集　歌苑古題類抄　全二冊近刻

平春海大人撰　假字拾要　全二冊近刻

尚書纂言　宋吳臨川註　洪範之部一冊

碁經龜鑑　跡曾八先生編　全四冊

長雄古今和歌集序　百頭先生

加茂真淵翁著　裝束の巻目を略す　小本一冊

唐山象棋譜　昆山先生著　一冊

長瀬真幸大人撰

第六集集佳淵　小本一冊

万葉集の中もとぐれてこゝろ引きもてるもとべを長きこゝろ引きもてるもとべを長きこゝろ引きもてるもとべを長き